
間宮先生と佐伯学生

MAY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

間宮先生と佐伯学生

【Nコード】

N1358T

【作者名】

MAY

【あらすじ】

教え子以上恋人未満の佐伯梓さえき あずさとやる気のない教師の間宮浩貴まみや ひろきの有りそつで無い日常の話。

ゴダールの祝日（前書き）

一話完結型で少しずつ投稿していく予定です。

ゴダールの祝日

カーテンの隙間から差し込む光が瞼に当たり目を覚ました。

随分と目に痛い日差しは夕暮れ太陽。

真昼間から見始めた映画はとくにエンディングを向かえてメニュー画面のままで止まっている。

ソファーベッドの上で寝転がりながら見たのが悪かったんだろう。いつの間にか寝てしまっていた。

当然のように隣にはあどけなさを残した少女が眠っている。

いつの間にか私の右腕を枕代わりにして無防備なかわいい顔をあらわにしているが、口から垂れる涎が私の欲望の鎌首を折ってしまっている。

「たくっ」

起こさないように少し頭を持ち上げ素早く枕を滑り込ませ自由を得た。

案の定右腕は重い頭部の圧迫を受けて痺れてしまっている。

腕を2、3度曲げ、同様に掌を広げては握る。それで痺れは取れることは無いが、自身の体の状態を確かめるような格闘選手の真似をしてみる。

状態は良好：第5ラウンドも支障なし。

馬鹿なことを考えながら立ち上がると、テーブルの上のタバコを片手に彼女を体をまたぐとキッチンに向かった。

タバコに火をつけ二吸いほどし、キッチンに備え付けてある灰皿

にタバコを置くとコーヒーの準備を始めた。
コーヒーマーカーに粉をいれ、水を注ぎスイッチをいれる。程なく真っ黒な液体がポットに注ぎ落ちてきた。

春先に少し奮発して買ったコーヒーマーカーは最近は何日のように稼働している。

少しでも美味しいコーヒーは飲みたいが、自分で豆をひくまでの拘りはない。

それでも、顔なじみになりつつある駅前のコーヒーショップから買ったお気に入りの豆は良い香りを部屋に漂わせる。

寝起きのタバコは霞がかった頭を更にボーっとさせてくれる。気にせずタバコを吹かしながら私は椅子に座り、コーヒーの出来るのを待った。

「んん…」

ソファーベッドの上で彼女が身じろぎする。右手を私が居た場所に伸ばし、何かを掴もうとしているがそこに私は居ない。

「んん…？」

何かを探すかのように誰もいないベッドの上で腕を上下させピタリと止まると、くるりと体を反転させた。彼女と目が合う。

「おはよう」

抑揚の無い声で彼女に寝起きの挨拶をする。

「…………おはよ」

彼女は不機嫌そうに挨拶を返した。

「コーヒー飲む？」

「飲む……」

「砂糖とミルクは？」

「いっぱい……」

「了解」

棚からマグカップを二つ取り出した。

一つは私のお気に入りのシャガールのカップ。もう一つはコンビの景品で貰ったアニメのカップ。

コーヒーを注ぎ、シャガールのカップに砂糖と牛乳を入れた。

両手に持ったマグカップをソファの傍にあるガラステーブルに置くと、身を起こした彼女は両手を伸ばし覆うようにカップを手にする。

私もテーブルの傍へ座るとブラックのコーヒーを一口。苦味より酸味の強いコーヒーは香りが口の中でも残る。

特に何か話す訳でもなくお互いコーヒーを飲む。

「映画どうだった？」

私は彼女に感想を求めた。

「つまんない。ていうか、訳が分かんなかった」

言葉だけでなくブスツとした表情も感想をよく表している。

「そっか、ゴダールは佐伯にはまだ早かったか」

フツと笑みを私は浮かべた。
馬鹿にされたと思ったのか彼女はムツとした。

「人って無駄に歳を食うと、こういう小難しそうなモノを見て大人になった気になるのね」

彼女の意見が少し耳に痛かった。

「言っておくけど、俺も理解してるわけじゃないからな。というか、佐伯と一緒に。訳が分からん」

「じゃあ、なんでこの映画借りてきたの？」

「不思議なんだけどな。ゴダールの映画って見終わると何故か胸を打つんだよ。俺は初めて見た時に理由もなく涙が出た」

彼女はふーんと生返事をする。興味があるのかないのか。

「佐伯の言う小難しいモノっていうのは無駄に歳を取ると何かを感じ取れたりするんだよ。それは青春の残光だったり、社会への不満だったり、自分への戒めだったり、人によるんだろうけど……。勿論歳を取っても分からない人もいるし、若くても分かるヤツもいる。少なくとも見たから大人になれるわけじゃないよ」

「それって、周りがすばらしいって言ってるから自分もそう思ってるだけじゃない？」

「それも否定できない。無駄に歳を取ると「分からない」ってことが言えなくなるからね。でも、それでも人の感性に訴えかける作品が世の中にあるのは間違いないと俺は思う。多分それが前衛芸術っていうジャンルじゃないかな？」

「ふーん……」

どこか納得の言っていない彼女。大人と子供の境目特有の大人を

否定したいが、享受することで大人になりたい。
そんな感情を彼女から感じることが出来る。

「正直言うと俺はピカソは分からない。絵画ってジャンルを多く見てないし、沢山見れば分かるのかもしれないけど、そこまで興味はない。未だに俺の中ではピカソは変な絵止まりだよ」

「大人は簡単に「分からない」って言っちゃダメなんじゃないの？」

私の揚げ足を取れたのに少し得意げになる彼女。

「別に佐伯の前で誤魔化す必要は無いだろ」

私は笑いながらコーヒーをもう一口飲んだ。

思わず「教え子なんだし」と、一言付け加えそうになったが、そんな事を言えば彼女は機嫌はたちまち悪くなるだろう。

聡い彼女は雰囲気で気付いたかもしれないと心配したが、逆に少し照れていた。特別視したような私の物言いは彼女を喜ばせたようだ。

「まあ、ゴダールは俺の趣味だから。気にするな。他の見ようぜ」

レンタルショップの袋から二つのDVDを取り出した。一本は彼女の見たい恋愛映画。もう一本は投入資金が歌い文句だった娯楽映画だ。

「どっち見る？」

そう聞くと彼女はDVDのコントローラーを手にしてもう一度ゴダールの映画を再生させた。

「もう一回見る」

両腕で枕を抱きしめるようにソファーに座りなおすと真剣な表情で鑑賞を始めた。

ダメだよ。その映画考えながらマジメに見るものじゃなくて、何となくボーっと見るものだよ。

だが、私は言わない。

そんな背伸びをする彼女が可愛いと思った。

いつか彼女が大人になってゴダールの事を思い出して、もう一度見た時に何かを感じ取ってくれればいい。

そう思っただけは言わなかった。

私は立ち上がり、先ほどまで寝ていた彼女の隣の位置に再び戻ると、またソファーベッドに寝転がりながらゴダールを見始めた。

正確にはゴダールを見る彼女の横顔を見ていた。

恐らく私はまた寝てしまっただろう。彼女が起きていれば映画が終わったら私を起こすだろうし、もし彼女が寝てしまってもそれはそれで構わない。

彼女の手には両手で持ったシャガールのマグカップ。

シャガールの「楽園」は彼女の手の中にすっぽりと納まっている。

ゴダールの祝日（後書き）

作品の中に出てきたゴダールはフランスの有名な映画監督「ジャン・リュック・ゴダール」の名前です。御年80歳にして現役というフランスを代表する映画監督です。

興味を持たれた方いらっしゃれば代表作の「気狂いピエロ」をお勧めします。

ストーリーはそこまで面白くありませんが、何故か引き込まれてしまふ、そんな不思議な映画です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1358t/>

間宮先生と佐伯学生

2011年10月8日21時08分発行